

チャーリーたちは灌木林の中を歩きながら、めぼしい木が見つ
 くと、表面を指でばんばんと弾いた。慣れてくるとその指の感
 触や音で、中がどれくらいぐぬかれているかわかるらしい。チャ
 ーリーの腰には斧がさしてある。これと決めた木をその斧で切る。
 予想通り中がすっかり空洞になっていると、その場で斧を使い簡単
 に皮を剥ぎ、イマハルと一緒に両端を持った。

この木を乾燥させ、表面をみがきペイントし、楽器は完成品になるのだそうだ。

ペインティング・ロックスも至るところに転がっている。

乾燥した土地に、雨季には水路になると思われる道がいくつかある。そうした近辺には大小の岩石が転がっている。表面はいずれも灰色の何の7変哲もない石だが、それらの中には目の覚めるような鮮やかな色の眠っているものがある。黄色や、白や赤、黒などの原色を見事に発色する石だ。

デイジュリウドウだけではなく、アボリジニの絵画の彩色は、すべてこの天然の石でなされるのだ。

「この石もペインティング・ロックスだ。擦ってごらん」

岩場に出ると、チャーリーがしゃがみこんで私に教えてくれた。

外側は灰色の、汚れたチョークのように見える石が、擦ってみるとやわらかく、ほかの石に擦りつけると鮮やかな赤を発色した。私は夢中になって石拾いを始めた。まぬけな話だが、私は昔から栗拾いや貝拾いといった、そうした拾い物になると8がぜん張り切る癖がある。このときも突然、元氣を取りもどし、石をどんどん拾いチャーリーに手わたそうとすると、

「お土産に持っていきなさい」と言われた。

チャーリーは、そんな私を見て特別に石に興味を持つ人間だと思ったのか、さらに新しいことも教えてくれた。

岩場の中央には、古墳のように見える平らな石の積み上げられた場所があった。

「ここにある大きな石は、昔のアボリジニたちのキッチンだ。ここに火を焚いた跡があるだろう。この尖った石は矢じりだ。そしてこの丸く削られた石は、ウーマンズ・ストーンだ。そうだね、デイヴィッド？」

デイヴィッドはうなずく。

ウーマンズ・ストーンと呼ばれたその石は手のひら大で丸くすべらかだった。チャーリーはそれを私の手にのせ、さらに続けた。

「これで粉をひいたり、野菜をつぶしたりしたんだ。持って帰るかい」

「構わないの？」

9 私が驚きたずねると、チャーリーの方が不思議そうな顔をした。

「だってもうずっと昔のものなんでしょう？」

「何千年かは昔のものだと思う」

そう答えながらチャーリーは、だから何だと言うんだという顔をした。そんなものが落ちていたならすぐにロープが張りめぐらされ、研究対象にされてしまうのだということを、彼は考えつきもしないらしい。

「そんなものが、こうしてごろごろと落ちているのね」

「ここへはそんなに人は入ってこないんだ」

彼は当然のようにそう言った。

10 何というスケールの土地なのだろうと思った。

幾百年、幾千年も昔のものが、そのまま風に吹かれ転がっている。その上を当たり前のように動物たちが通り過ぎ、こうして時には人の目にふれる。それをだれも大さわぎしないのだ。

ウォーター・フォールにもどると、チャーリーは取ってきた木を干し、昼食にみんなの分のサンドイッチを作ってくれた。ライ麦パンにバターとからしをぬってハムをはさみ、皿にピクルスとザウワークラウトと、スライスしたトマトをたつぷりのせてくれた。

デイヴィッドも食べた。一つ一つ中身をのぞきながら、とてもうまいと言って食べた。

食べ終わると、デイヴィッドはクロコダイルのいるウォーター・フォールに釣糸を垂らした。私も横に並び、座った。

お腹がーぱいで、ほどよい日かげがあり、前の泉はワニはいるものの神秘的に深い木の香りを放っている。ブッシュを歩き回った心地よい疲労感が身体のスミズミに染みわたる。あとはビールがあれば最高ののだが、チャーリーはデイヴィッドがいる間はそれを出さなかった。私たちは代わりにあまいブッシュ・ティを飲み続けた。

私たちは日が暮れるまでじっと座っていたが、彼はもう、私に何も話しかけてはこなかった。ぼんやりした目で、釣糸を垂らしたままじっとしていた。

私も横に座って、仕方がないので釣糸を垂らすまねをしてみたが、何しろそのウォーター・フォールには魚のいる形跡などほとんどないのだった。太陽はまぶしく、背中とはげするように熱く、ゆるやかな風が時折頬をなでるだけの中で、何も待たずにじっとしていた。

私がついに一度デイヴィッドに本当は何歳なのかとたずねてみると、彼は少し首をひねり、また適当に、七十歳だ、というようなことを言った。

11 だがその間私たちは、まったく不愉快ではなかったと思う。あえて私たちは、と言いたいのだが、たがいに何も話さずに時間を過ごしていながら、その間に私にはデイヴィッドのことが少しずつわかっていくようではなかったのだ。12 変な表現だが、デイヴィッド

という人が溶けていく感じだった。彼は何をするでもなく時折居眠りしていたし、私も同じだったが、夕暮れが迫り彼が帰る頃になると、私たちは並んで座り始めた頃よりずっと親しんでいた。その感覚はどうにも説明しようがない。ただ、私たちは何も話さずに、だが会話していたようだったと言ってしまう。そんな経験を、私はほかにしたことがない。デイヴィッドはこれまでに私が出会ったどんな人ともちがう、不思議な人だった。

夜になるとチャーリーは、また火を囲み、こんなことを話してくれた。

「デイヴィッドは、集落の重要な仕事を担当する長老だ」と。

チャーリーは、ウイスキーを入れたホーローのカップを手にとらに続けた。

「デイヴィッドはすでにドリーミングを完成させた。ほかの集落のセレモニーにも呼ばれるようになったらしい」

ドリーミングの解釈は様々だが、チャーリーはそれを、

「うまくはいえないが『注』白昼夢のようなものだ」と説明した。

かつてこの大陸をジザイに歩き回っていたアボリジニたちは、地図や、コンパスや、手帳を持ったことは一度もなかったのである。彼らは、そうした物がまったくなくとも、たとえば決まった日時にある一本のユーカリの木の下で、異なる部族の男同士が落ち合うこ

とができたのだそうだ。そんな彼らは地図を持たない代わりにソングラインという歌の道を持っていた。

チャーリーが言うには、白昼夢はまた夢告げのようなものであり、彼らにとっては重要な^{【注7】}インフォメーションなのである。アボリジニたちは子供の頃からこのストーリーを書き続けてゆく。完成する者もしない者もあるが、デイヴィッドはすでにそれを完成させたのだ、というのだった。

泉からはまたクロコダイルの立てる音がし、鳥の鳴き声が辺りに響き、火が目の前でぶすぶすと**モ**え続けていた。

「デイヴィッドは本当に年齢を知らないのね？」

私がつねると、チャーリーは言った。

星のよくかがやく晩で、風がおだやかに空気をゆっくりと旋回させていた。

「13 彼らが大切にしているのは、そうした現実世界ではなく、

^{【注8】}スピリットのワールドなんだ。ドリーミングを信じ、描く。そうすれば、たとえばデイヴィッドが死んでも」

チャーリーはそう言う、焚き火で照らされた足元の砂を拾い上げ、大きな手の中からさらさらとこぼした。

「彼のスピリットは生きて、この Land は彼のことを憶えているんだ」

そう言った。

「Land？」

私がつねかえすと、チャーリーはうなずいた。Land、この土地は彼のことを憶えている。

私は感動し、全身が**コキザ**みに震えるのを感じた。それは、闇の中で話すチャーリーの淡々とした話し方にひきつけられていたということも、もちろんある。

だが何より、その話には、私がそこでキャンプをし始めたときから、もしくは居住区に足をふみ入れたときから感じていた何かが含まれていた。闇の恐怖を薄れさせる独特のやわらかさ、木々のざわめき、だれも見せるおだやかなリズム……。そう言われて**アラ**タめて辺りの闇に14目をこらす。森があり、岩肌^{いわはだ}に囲まれた泉があり、その周囲の砂の一边に私たちは今座っている。

火の粉が時折、生き物のように砂の中へ飛んでは消えた。

「この土地は彼のことを憶えている……」

イマハルが無意識にそうくり返すのを私は聞いた。

問一 本文中の太字の**カタカナ**は漢字に直し、**漢字**は読みをひらがなで答えなさい。

問二 1 そうしてアボリジニの友人たちと独特の距離を取っている について、次の問いに答えなさい。

(1) ばう線部1は、チャーリーがどのような行動をとったことを指していますか。もっともよくあてはまるものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 自分たちとはちがった格好をしているデイヴィッドを、人に見られないように車でむかえに行くこと。
- イ コーヒー好きのデイヴィッドのために、ミルクと砂糖の入ったコーヒーを用意すること。
- ウ デイヴィッドがいらないと言った分のビスケットも、それとなく持って帰れるようにすること。
- エ 白人であるチャーリーが消極的なデイヴィッドを、自分のひらくお茶会に参加させること。

チャーリーは砂のついた手を払うと、マットにひじをつき、続けた。

「それでも彼らはパンツをはくようになったからね。かつてアボリジニたちはパンツをはかずに火の夢、水の夢を見た。それらに導かれ旅を続けた。でも今ではパンツをはいて、国に勝手に支配されて移動することもできない。15 少しずつスピリットは失われているんだ」

チャーリーはそうして、さらにいくつかのアボリジニたちの話を教えてくれた。

そんなチャーリーがしばらくすると、ふと私とデイヴィッドの様子を思い出したかのように言った。

「日本人とアボリジニはよく似ているよ。君たちはたがいにもたずねない」

そんなことはない。私はだれにもよく物ごとをたずねるおしゃべり女なのだと思ったが黙った。16 私はあの時間、デイヴィッドが夢を見ていたことを確かに感じていたのだと答えたかったが、それも言えなかった。たった一度きり一緒に過ごしたよそ者がそんなことを言うのは、あまりに^{【注9】}不遜だとふとちゅうちよしてしまった。それは私の思いこみで十分ではないか、と。

だがあの時間、デイヴィッドは私の横でぼんやりと釣糸を垂らしながら、確かにこの土地の精霊たちと交信していたのである。私は彼の横でその感覚に支配されていた。

17 私は私の無意識が、日本語でも英語でもないまったく別の言語の感覚を急速に要求していることを知った。あるいはもしかしたら、それは言語を超えた直感を信じるということだったのかもしれない。

(谷村志穂『アボリジナル・ランド』)

【注】

- 1 アボリジニ 〃オーストラリアの先住民
- 2 フィール 〃ふん囲気
- 3 ブッシュ 〃しげみ
- 4 ウォーター・フォール 〃滝
- 5 灌木林 〃低木の林
- 6 白昼夢 〃真昼に見る夢、また非現実的な空想
- 7 インフォメーション 〃情報
- 8 スピリット 〃たましい
- 9 不遜 〃思い上がった態度

(2) ぼう線部1とは、どのようにすることですか。もっともよくあてはまるものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 自分の考えを感情的に表すこと。
イ 相手の文化を学びながら身につけること。
ウ 自分の思いを積極的に伝えること。
エ 相手の立場を考えながら接すること。

問三 本文中の「A」にもっともよくあてはまるものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 息を殺して イ 肩をおとして ウ 風のように エ 蝶のように

問四 ぼう線部2と8の言葉の使い方としてもっともふさわしいものを次のア～エの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

- (1) 2 ややもすると
ア 夏休みはややもするとなまけがちである。
イ 遠足はややもすると中止になった。
ウ 入学式はややもすると楽しい。
エ クリスマスはややもするとお正月になる。

(2) 8 がぜん

- ア 注意されてもがぜん意見を変えない。
イ ほめられたらがぜんやる気が出てきた。
ウ 二つを比べてがぜんこちらのケーキが好きだ。
エ 時間のある限りがぜん問題を解きつづける。

問五 3 「また気がつかなかった」 とありますが、

(1) 何に「気がつかなかった」のですか。ここまでで「気がつかなかった」ものをすべて書きなさい。

(2) なぜ「気がつかなかった」のですか。理由となる一文を本文中からぬき出してはじめての五字を書きなさい。

問六 4 私は本当におろかだと思う とありますが、「私」のどのようなところが「おろかだと思う」のですか。解答らんに合うように書きなさい。

問七 5 唇をかんでいる とありますが、この時の「私」の気持ちにあてはまるものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 自分の努力不足を後かいする気持ち。 イ ばかりにされてくやしく思う気持ち。
ウ 自分のことをわかってもらえずおこる気持ち。 エ 日本への思いちがいにあきれる気持ち。

問八 6 自分のデイジュリドゥを作るための木を探していた とありますが、

(1) 「デイジュリドゥ」とは何ですか。漢字二字で本文中からぬき出して書きなさい。

(2) ここでの「デイジュリドゥ」の特徴の説明としてあてはまるものを次のア～オの中からすべて選び、記号で答えなさい。

- ア 天然に生えている木で作られている。 イ サーモンのようにピンクがかっている。
ウ 内部は人の手でくりぬかれている。 エ 発色する石によって色がつけられている。
オ 手のひら大で丸い形をしている。

問九 ぼう線部7と14の言葉の意味としてあてはまるものを次のア～エの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

- (1) 7 変哲もない
ア まとまった考えがない。 イ たいしてかたくない。
ウ とくに変わったことがない。 エ はつきりとはちがわない。

(2) 14 目をこらす

- ア じつと見つめる。
イ まぶたを閉じる。
ウ 目を大きく見開く。
エ 自然に気がつく。



問十 9 私が驚きたずねると、チャーリーの方が不思議そうな顔をしたとありますが、次の文はなぜ「私」が驚いたかを説明する文です。

【A】「C」に適切な表現を補い、文を完成させなさい。ただし、【A】・【B】ともに本文中の語を使い、【A】は十五字以上二十字以内、【B】は五字以上十五字以内、【C】は自分の言葉で、漢字二字で書きなさい。

チャーリーが【A】

【私】はこの石は【B】 【A】 【C】 【もの】 【C】 【なものであるはずだと思ったから】

問十一 10 何というスケールの土地なのだろうと思ったとありますが、なぜこのように思ったのですか。もつともよくあてはまるものを

- 次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。
ア 石が積み上げられた場所がとても広いから。
イ 気にかかるべきものが何気なく置かれているから。
ウ 危ない動物が人をおそれ歩き回っているから。
エ だれもがその土地の歴史を大切に思っていないから。

問十二 11 だがその間私たちは、まったく不愉快ではなかったと思うとありますが、ここでの「不愉快」に感じるはずのこととはどのようなことですか。本文中の四角で囲んだ範囲から具体例を探し、その中の一つを十字以上で書きなさい。

問十三 12 変な表現だが、デイヴィッドという人が溶けていく感じだったとありますが、どのようなことですか。もつともよくあてはまるものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。
ア 二つの個性が交じり合うことで、私とデイヴィッドのちがいが少しずつなくなっている。
イ 二つの文化が会合することで、私とデイヴィッドの距離が少しずつ広がった。
ウ 同じ空間にいることで、私とデイヴィッドの会話が少しずつ始まった。
エ 同じ時間を過ごしたことで、私とデイヴィッドの心が少しずつ通い合っている。

問十四 13 彼らが大切にしているのは、そうした現実世界ではなく、スピリットのワールドなんだとありますが、

- (1) 「彼ら」とは具体的に誰のことですか。本文中からぬき出して書きなさい。
(2) 次のア～カを「現実世界」のもの、「スピリットのワールド」のものに分け、「スピリットのワールド」にあてはまるものをすべて選び、記号で答えなさい。

ア 地図 イ コンパス ウ 手帳 エ ソングライン オ パンツ カ 火の夢

問十五 15 少しずつスピリットは失われているんだとありますが、それによってどのようなことが起きましたか。あてはまるものを次のア～オの中から二つ選び、記号で答えなさい。

- ア 国に禁止されたことで、火の夢や水の夢を見ることができなくなった。
イ 国に支配されたせいで、大陸を自由に動き回ることができなくなった。
ウ 新しい言語を獲得して、自らの文化を明確に発信できるようになった。
エ 自分たちの文化を主張せずに、たがいに話しあうことをさけるようになった。
オ パンツをはくという外からの文化を受け入れて、生活するようになった。

問十六 16 私はあの時間、デイヴィッドが夢を見ていたことを確かに感じていたのだとありますが、「夢を見ていたこと」とはどのようなことですか。解答らんに合うように本文中から探し、十五字以上二十字以内で書きなさい。

問十七 17 私は私の無意識が、日本語でも英語でもないまったく別の言語の感覚を急速に要求していることを知った。とありますが、この文章は「私」が「デイヴィッド」という他者とすごしたことをきっかけに、今まで意識したことのない感覚に気づいた場面です。あなたは同じような経験をしたことがありますか。ない場合は想像したことでも良いです。その経験と、どのように感じたのかを書きなさい。また、その時に考えたことを説明しなさい。

リップ

時折

ジザイ

モ

コキザ

問一

え

み

アラタ

めて

問二 (1)

(2)

問三

問四 (1)

(2)

問五 (1)

(2)

問六

ところ。

問七

問八 (1)

(2)

問九 (1)

(2)

問十 A

B

C

問十一

問十二

問十三

問十四 (1)

(2)

問十五

問十六

こと。

問十七

答えは

国語一六

の解答らんに書きなさい。